

おりおりのうた

さまざまのこと憶い出す桜かな（芭蕉）

余りにも有名な句です。任運荘の高齢者にとつても、折折の季節は過ぎし日を切にしのばせ、悲しくも一会一期の覚悟を抱かせます。

来年もまた帰れるかと案じつつ

先祖の靈に手を合わす（片山キヌ）

先にゆく身あと何回の敬老日（後藤スエ子）

十五年目にかかる任運荘、高齢者は衰え、自力で詠める人は五人、あとの三十人は寮母の問いかけで心の中を出して頂く。ふしぎと、つぶやく言葉がそのままうたです。雪の日―何を一番考えますか、答えて「雪降りやじいさんさぞかし困るだろう」（野仲シズ子）。花の季で―寮母はその背をさすりながら、花見は雨で残念でしたねと。晴れたら「面会のおじいさんと花見がしたい」（和田キミ）。

三代ヒサ子さんは昼間はだれとも口をきかないが、夜はおむつ換えに来る寮母にき

まつて問います。「いま何時な、いま何時な、まだ夜は明けんなー」。寮母はすぐ紙に書いて「歌が出来ましたね」と手渡します。五月祭には額に入れて展示。良寛和尚の長歌うたと何と深く通じ合っていることでしょう。

「この夜らの いつか明けなん この夜らの 明けはなれなば 女おんな来てはり（糞尿）を洗はむ こいまろび 明かしかねけり ながきこの夜を」。こいまろびとは転げ回ること。独り暮らしの良寛さんは晩年慢性下痢で苦しみました。高齢者には夜が長く思えてならない日がきつと多いことでしょう。

激痛に泣く夜夜を、久保生いけるさんは「祖母山そぼさんの雨緒方町あがた恋ひしと夜に降る」と歌います。定年で退職する寮母の手を握って「わしの最期をだれが看みるのか」と泣いた夕、発熱。急性肺炎、入院。ついに帰ることなし。ああ、「死ぬ時は任運莊」と言い続けた久保さん！

（一九八九年七月六日）